

にじりえ

樋口 一葉

朗読 yukari

出所 朗読プチメゾン

<http://www.voiceblog.jp/bird330/>

いづりえ

樋口一葉

冒頭部分

おい木村さん信さん寄ってお出よ、お寄りといったら寄っても宜いではないか、また素通りで二葉やへ行く気だろう、押かけて行って引ずって来るからそう思いな、ほんとにお湯なら帰りにきつとよっておくれよ、嘘つ吐きだから何を言うか知れやしないと店先に立って馴染らしき突かけ下駄の男をとらえて小言をいうような物の言いぶり、腹も立たずか言訳しながら後刻に後刻にと行過るあとを、ちよつと舌打しながら見送って後にもないもんだ来る気もない癖に、本当に女房もちになつては仕方がないねと店に向つて鬨をまたぎながら一人言をいえば、高ちゃん大分御述懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい焼棒杭と何とやら、またよりの戻る事もあるよ、心配しないで呪でもして待つが宜いさと慰めるような朋輩の口振、力ちゃんと違って私しには技量がないからね、一人でも逃しては残念さ、私しのような運の悪るい者には呪も何も聞きはしない、今夜もまた木戸番か何たら事だ面白くもないと肝癪まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとん／＼と土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白

粉べったりとつけて唇は人食う犬のごとく、かくては紅も厭やしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背かっこうすらりつとして洗い髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸もと計の白粉も栄えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、煙草すば／＼長煙管に立膝の無作法さも咎める人のなきこそよけれ、思い切ったる大形の裕衣に引かけ帯は黒縹子と何やらのまがい物、緋の平ぐけが背の処に見えて言わずと知れしこのあたりの姉さま風なり、お高といえるは洋銀の簪で天神がえしの鬚の下を搔きながら思い出したように力ちゃん先刻の手紙お出しかという、はあと気のない返事をして、どうで来るのではないけれど、あれもお愛想さと笑っているに、大底におしよ巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想でできる物かな、そして彼人は赤坂以来の馴染ではないか、少しやそつとの紛雜があるうとも縁切れになって留る物か、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるように心がけたら宜かる、あんまり冥利がよくあるまいと言えば御親切に有がとう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、なき縁とあきらめて下さいと人事のようにいえば、あきれたものだと笑ってお前などはその我ままが通るから豪勢さ、この身になっては仕方が

ないと団扇を取って足元をおおぎながら、昔しは花よの言いなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄ってお出でと夕ぐれの店先にぎわいぬ。

店は二間間口の二階作り、軒には御神灯さげて盛り塩景気よく、空壇か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる処も見ゆ、勝手元には七輪を扇ぐ音折々に騒がしく、女主が手づから寄せ鍋茶碗むし位はなるも道理、表にかかげし看板を見れば子細らしく御料理とぞしたためける、さりとして仕出し頼みに行たらば何とかいうらん、俄に今日品切れもおかしかるべく、女ならぬお客様は手前店へお出かけを願いまするとも言うにかたからん、世は御方便や商売がらを心得て口取り焼肴とあつらへに来る田舎ものもあらざりき、お力というのはこの家の一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言うやうにもなく我まま至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思えば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際では存の外やさしい処があつて女ながらも離れともない心持がする、ああ心とて仕方のないもの面ざしが何処となく冴へて見へるは彼の子の本性が現われるのであろう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、

さても近来まれの拾いもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添わった、抱え主は神棚へささげて置いても宜いとして軒並びの羨み種になりぬ。

お高は往来の人のなきを見て、力ちゃんお前の事だから何があったからとて気にしてもいまいけれど、私は身につまされて源さんの事が思われる、それは今の身分に落ぶれては根っから宜いお客ではないけれども思い合うたからには仕方がない、年が違をが子があるがさ、ねへ左様ではないか、お内儀さんがあるといつて別られる物かね、構う事はない呼出してお遣り、私しのなぞといたら野郎が根から心替りがして顔を見てさえ逃げ出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかかるのだがお前のはそれとは違う、了簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は気位が高いから源さんと一処になろうとは思うまい、それだものなおの事呼ぶ分に子細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうから彼の子僧に使いやさんを為せるが宜い、何の人お嬢様ではあるまいし御遠慮計申てなる物かな、お前は思い切りが宜すぎるからいけない兎も角手紙をやって御覧、源さんも可愛そうだわなと言いながらお力を見れば煙管掃除に余念のなきか俯向たるまま物いわず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すってポンとはたき、またすいつけてお高に渡しながら気をつけておくれ店先で言われると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手伝いを情夫に持つなどと考違えをされてもならない、それは昔しの夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞て源とも七とも思い出されぬ、もうその話しは止め／＼といいながら立あがる時表を通る兵児帯の一むれ、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相変らず豪傑の声かかり、素通りもなるまいとてずっと這入るに、たちまち廊下にばた／＼という足おと、姉さんお銚子と声をかければ、お着は何をと答ふ、三味の音景気よく聞えて乱舞の足音これよりぞ聞え初ぬ。